

# チベット語訳『妙法蓮華註』の序文の構成について

望月 海慧

## はじめに

中国仏教では『法華経』に対する研究が盛んであり、多くの注釈書が書かれているのに対して、インド仏教では同経に対する注釈書は、漢訳としてしか伝わらないヴァスバンドウの『妙法蓮華経優婆提舍』のみである。インドにおけるアンソロジー文献においても『法華経』の引用数は多いとは言えない。それ故に、インド仏教においては、『法華経』が主要経典であったということはできない。

しかしながら、『法華経』が注目されていなかったわけでもない。インドにおける中観派と瑜伽行唯識派の間の一乗と三乗の論争に見られるように、思想解釈の論拠となる重要経典でもあった。このことはチベット仏教においても認識されている論点である。おそらく、チベット語のテンギュルに圓測の『解深密経疏』と基の『妙法蓮華経玄賛』の漢文テキストのチベット語訳が収められている理由も、この一乗と三乗に関する論点で注目されたのであろう。

本稿で取り上げるチベット語訳『妙法蓮華註』については、これまでの先行研究によりさまざまな議論がなされているが、基による『妙法蓮華経玄賛』の和訳である。その分量の違いなどから、いろいろな憶測がなされてきたが、正確にテキストを読んでも、漢文からチベット語に翻訳されていない部分には、それなりの理由があることがわかる。まず、漢文テキストで引用される『法華経』は鳩摩羅什訳の『妙法蓮華経』であるのに対して、チベット語訳者が引用する『法華経』は『妙法蓮華経玄賛』に引用される経文をチベット語に翻訳したものではなく『法華経』のチベット語訳に基づいている。すなわち、チベット語の翻訳者はチベット語訳『法華経』に基づいて『妙法蓮華経玄賛』を読んでいるために、テキストの相違により解説の意味内容が理解できない問題が生じている。チベット語訳テキストが途中で終わっている理由も、チベット語訳にはない「提婆達多品」への対応に混乱が生じたからであろう。また、『妙法蓮華経玄賛』には中国語独自の語義解釈等も見られる。このような解説も、チベット人には理解困難であるために、チベット語の翻訳が欠けている。さらには、経典の引用については、引用量が多量な為にそれぞれのテキストのチベット語訳の確認が困難であったのか、省略されるケースが多い。これらの相違箇所については、本稿に続くテキスト全体の和訳において具体的に指摘するつもりである<sup>(1)</sup>。

## 1. チベット語訳テキストの序文の構成

本稿では、チベット語訳テキストの序文を取り上げ、その構成を漢文テキストとの相違とと

もに明らかにし、その和訳を提示する。この序文では、漢文テキストは冒頭に著述理由を述べた後に、「序品」の意味が述べるが、チベット語訳テキストはこの部分を欠いている。また、これに続く部分も、漢文テキストは「經 如是我聞 贊曰」から始まるのに対して、チベット語訳テキストはこの句も欠いている。すなわち、漢文テキストは、テキスト全体の構成を論じる部分も「序品」に含んでいるのに対して、チベット語訳テキストはこの部分を「序品」に含めていない。

チベット語訳テキストの序文の構成を示すと次の通りである。

## 0 序文<sup>(2)</sup>

### 1 経典の解説の序論<sup>(3)</sup>

#### 1.1 序<sup>(4)</sup>

##### 1.1.1 行

##### 1.1.2 願

##### 1.1.3 求めること

##### 1.1.4 保持すること

##### 1.1.5 奇瑞

##### 1.1.6 解説する原因

#### 1.2 議論と疑惑への執着の除去

##### 1.2.1 議論

##### 1.2.2 疑惑への執着の除去

#### 1.3 授記と行により説いたもの

##### 1.3.1 授記

##### 1.3.2 行

#### 1.4 今時と他時における利益の意味

##### 1.4.1 今時

##### 1.4.1.1 結果の獲得の授記による利益

##### 1.4.1.2 明らかな成就の授記による利益

##### 1.4.2 他時

#### 1.5 時と根により説いたもの

##### 1.5.1 時

##### 1.5.1.1 頓時に説いたもの

##### 1.5.1.2 漸時に説いたもの

##### 1.5.2 根

## 2 経典の意味を説いたもの

## 2.1 一般的特徴

## 2.2 この経典の特徴

## 3 章の順番により説いたもの

## 3.1 章の数

## 3.2 章の順序

## 4 本文の解説（序品以下の解説）

これと比較するために、漢文テキストにおける序文の構成を示すと次の通りである。

## 0. 蓋聞

## 1. 叙経起之意

## 1.1. 酬因請

## 1.1.1. 酬因

## 1.1.1.1. 酬行因

## 1.1.1.2. 酬願因

## 1.1.1.3. 酬求因

## 1.1.1.4. 酬持因

## 1.1.1.5. 酬相因

## 1.1.1.6. 酬説因

## 1.1.2. 酬請

## 1.2. 破疑執

## 1.2.1. 破疑

## 1.2.2. 破執

## 1.3. 彰記行

## 1.3.1. 彰記

## 1.3.2. 彰行

## 1.4. 利今後

## 1.4.1. 利今

## 1.4.1.1. 果記利

## 1.4.1.2. 現証利

## 1.4.2. 利後

## 1.5 顯時機

## 1.5.1 顯時

## 1.5.1.1. 頓

## 1.5.1.2. 漸

## 1.5.2 顕機

## 2. 明経之宗旨

## 3. 解経品得名

## 4. 顕経品廃立

## 5. 彰品之次第

## 6. 釈経之本文

これらの構成を比較して、チベット語訳テキストと漢文テキストの相違点を指摘すると次のようになる。

序文の全体構造は、漢文が6項目に分けているのに対し、チベット語訳は4項目になっている。これは漢文の第2項「明経之宗旨」から第4項「顕経品廃立」がチベット語訳では第2項「經典の章の意味を説いたもの」にまとめられているからである。その理由も、漢文の第3項冒頭において漢語による経題の解釈があり、また第4項は漢訳者である鳩摩羅什の翻訳経緯の説明があり、チベット語訳者には理解し難い内容であったからであろう。

この第1項の「序論」の支分については、チベット語訳と漢文は5項目で同じであるが、チベット語訳の第2項「議論と疑惑への執着の除去」のタイトルには混乱がある。すなわち、漢文はこの5項の最初の「酬因請」を「因」と「請」に細分化し、前者をさらに6項に分けるのに対して、チベット語訳はこの細分化を省略して「酬因請」に対応する「序」を6項（ただし見出しは5項）に分けている。そのため次の「破疑執」前に残された漢文の「酬請」の部分に対応する文章が、チベット語訳の「議論」、それが「疑惑への執着の除去」と並記されている。

## 2. チベット語訳に見られる特徴

チベット語訳の漢文との相違点は、前述のように、チベット語訳者が理解できないコンテキストに生じている。本論の序文において最大の問題となるのが、『法華経』自体の構成である。チベット語訳者は同経のチベット語訳に依拠しているために、チベット語訳『法華経』には章立てされていない「提婆達多品」が理解できないのである。すなわち、漢文テキストは全体を「28品」とするのに対してチベット語訳テキストでは「27章」であり、漢文にある「提婆達多品」のタイトルには「勸持品」のチベット語訳が添えられている。チベット語訳が「見宝塔品」で終わっているのも、このことが起因しているのであろう。また、漢文の序文の最後には「囑累品」の解説が末尾に置かれた理由が解説されるが、チベット語訳者はその理由を述べる意味が理解できないのか、翻訳はなされない。

このような理解困難な問題は『法華経』に関するものだけでなく、インド仏教史に対する中国的理解にも生じている。すなわち、漢文の「明経之宗旨」において部派の伝承などが詳論されているが、チベット語訳は抄訳となっている。「中百十二門般若等」とあっても、「十二門」

が龍樹の『十二門論』だとは理解できなかったのであろう。

また、漢文テキストには見られない情報をチベット語訳者が加えている場合もある。それが、序論の「行」の解説におけるヴァスバンドゥへの言及である。それは、彼の『法華論』における「方便品」の八甚深に言及したものであるが、漢文テキストには「准論」とあるだけで具体的なテキストを指摘していないのだが、チベット語訳者はこれをヴァスバンドゥに特定している。このことは、少なくとも『法華論』の存在をチベット人が認識していたことを示している。

### 3. チベット語訳テキストの序文の和訳

#### [0.0] タイトル

『聖妙法蓮華釈』に入る

『妙法蓮華釈』漢訳からの翻訳。第1巻

#### [0] 序文

この經典の解説を四つの意味により区別するべきである。すなわち、經典の解説の序論と、この經典の章の意味を説いたものと、章の順番により説いたものと、本文を解説するものとの四つである<sup>(5)</sup>。

#### [1] 經典解説の序論

この經典の序論も意味は五つで、序と、議論と疑惑への執着を取り除くことと、授記の行を説いたものと、今時と他時における利益の意味を説いたものと、時と根を説いたものとで、五つである<sup>(6)</sup>。

#### [1.1] 序

序にも<sup>(7)</sup>五種があり、行と、願と、求めることと、保持することと、奇瑞とで、五つである<sup>(8)</sup>。無上の仏を成就しても正しい行をとまなう者が最初に成就し、行も誓願をとまなう必要があり、行と願をとまなっても、努力をもつことが求められ、保持すれば、最初に結果を得るであろう。円満な結果により多くの有情の利益をなすことを意図しており、このとても深い經典を解説する大きな奇瑞を示している。仏世尊が世間に生まれることも、「一つの大義のために生じる」というのも、それである<sup>(9)</sup>。

#### [1.1.1] 行

そこで行の根本も、「方便品」でこの經典を注釈したヴァスバンドゥ<sup>(10)</sup>による八つの甚深が

説かれているように、多くの無数の過去仏を尊敬し、奉仕し、仏世尊による無数の所作と行を努力し、円満な名声によりとても深い過去に生じた法に入ることは難しいと如來自身が意図しており、それぞれの意に応じて説くことを声聞と独覺は知ることはできない。さらにまた、所取と能取がとても深く、読誦し、読むことはとても深くて、行はとても深く、結果はとても深く、福德を広げる心はとても深く、勝義を信解する心はとても深く、無上はとても深く、入ることがとても深く、不共がとても深く、声聞と独覺の行より特別に勝れているので、これらのとても深いものが仏世尊の一切の行を完成させ、一乗の行をともない、一切の相を知る原因を完成させるので、無上の結果を獲得させるその導入の原因が説かれているので、この正法を示すのである<sup>(11)</sup>。

### [1.1.2] 願

そこで、願の原因は、また「方便品」に、「シャーリプトラよ、私は過去時において一切衆生に、私のように、無上等証覺を成立させる」という誓願が立てられているので、その誓願自身を成立させ、衆生救済を獲得し、過去時に本願し、誓願を立てたそのことを行じ、結果が等しく成立するように、一切衆生もその行に入るので、その意味が説かれている<sup>(12)</sup>。

### [1.1.3] 求めること

それを求める原因は、「勸持品<sup>(13)</sup>」に、「私は過去時にこの正法を望んだので多くの劫の間に懈怠を知らずに求め、過去の王でがなされた時に四方に法螺貝と太鼓を打って法を求めた際に仙人から法を聞くために無数の奉仕と恭敬をなした」と言うことは、善友から法を聞くことを求める原因と導入を示している<sup>(14)</sup>。

### [1.1.4] 保持すること

それを保持する原因は、前に述べた八つの甚深から、最初に過去の仏世尊が無量百千の仏に奉仕と恭敬をなして、ここで、ガンガーの河の砂程の菩薩が仏に対する供養を成就してから、次第に多くの仏に供養し、善友と長い間親近するために経を保持し、読誦することで六根を淨化し、多くの仏を常に供養するようになるので、保持し、読誦することがとても深いと説かれている<sup>(15)</sup>。

### [1.1.5] 奇瑞

そこで奇瑞は、仏世尊は無上の結果を獲得してからこの經典を解説することを意図しており、「前に諸菩薩に奇瑞を説いたので、天の花を降らし、大地を動かし、光により顕現することにより多くの輪を面前で見て、歓喜と喜びの心により行くことが、世尊による『妙法蓮華』の解

説を意図する多くの奇瑞をお示しになられている」という考えなどの想が起こされる奇瑞が他の經典の解説と似ていないことを示すのが、大きな奇瑞である<sup>(16)</sup>。

### [1.1.6] 解説する原因

それを解説する原因は、「如来が世間に生じたり、大義が一つであるから」と言うものから、「その場所に声聞の衆会はおらず、菩薩の衆会のみ法を示して、一切相を知る知恵を得るまでになる」というまでが詳しく説かれており、三時の仏世尊のすべてが了義である大乘を示したり、時と根が成熟することを示すそのことが解説される。

## [1.2] 議論と疑惑への執着の除去

### [1.2.1] 議論

そこで解説を議論すること<sup>(17)</sup>は、例えば経に説かれる如くで、世尊が最初に始めた時に四方に七歩づつ進み、大きな光が方々に顕現してからすべてに獅子吼が意図する無限の一切衆生を救おうという誓願をもって、身体の家により生じてから城壁の四門を去り、世間を教化する奇瑞を見てから無上の道を求めるために宮殿から出て、種々なる苦行をなされて、等証覚された菩提樹下で金剛座に座る間に多くの衆会に最初の法を説き、根が成熟していない者たちに引導をとまなう法を示し、この經典を示す時は、根が熟した衆生らに了義が説かれていることを意図して、聖者シャーリプトラとマイトレーヤ菩薩とマンジュシュリー童子による請願の意味を一つに確実に説くことなどが、議論してから法を示すことである<sup>(18)</sup>。

### [1.2.2] 疑惑への執着の除去

疑惑を取り除くことは、世尊が等証覚を得ているならば、諸菩薩が無上等証覚を完成させることを授記しているが、声聞たちは決して無上菩提を得ることを授記していないので、「聖なるシャーリプトラなどの諸声聞には無上菩提の原因はない」と疑うようになり、菩薩らも「声聞たちは決して仏になる原因はない」と考え、ある不定の自性をもつ者たちも疑うようになるそのことを取り除くために、この經典において声聞と菩薩などがこの經典を少し一偈を聞いただけでも無上の仏を成就することを授記しているので、彼らの疑惑が取り除かれる<sup>(19)</sup>。

## [1.3] 授記と行により説いたもの

### [1.3.1] 授記

そこで、授記と行も、最初に明らかに悟ってから、その間に声聞の行により等証覚を授記していないが、ここで方便により導く時にあたり授記をするためである<sup>(20)</sup>。

### [1.3.2] 行

行は菩薩乗で、一乗がこの中に解説されているから。この經典自身からも、勝者の子で、寂靜な心で柔善で鋭根で、多くの仏に善根を植えた者たちに大乘のこの行が説かれているので、この經典が説かれている<sup>(21)</sup>。

## [1.4] 今時と他時における利益の意味

### [1.4.1] 今時

そこで、今時における利益は、この『妙法蓮華』は聖なるもので、下品になった者が聞いても利益となるから。それにも二種ある。結果を得ることを授記することによる利益と、現在明らかに成就することによる利益である<sup>(22)</sup>。

#### [1.4.1.1] 結果の獲得の授記による利益

結果の獲得を授記することは、聖者である五百人の声聞に無上菩提を授記することによるこの世における利益である。それを示すものも六つで、シャーリプトラなどの四大声聞は特徴が異なり、それぞれに授記を区別して授記しており、聖者プールナなどの五百人の声聞は特徴に応じて授記することでまとめて授記し、学と無学の大部分の多くの他の者たちは劣根なので後で授記し、デーヴァダッタの授記により慈愛と憎悪なく授記し、出家者と在家者と天子などを授記するからであり、使役なしに示しており、それは、この經典を解説する時に如來自身により授記される。常不輕菩薩に対して「一切衆生は如來の自性をもっている」という原因を意図して、説いており、その上の五つは、今生における利益の門から授記している<sup>(23)</sup>。

#### [1.4.1.2] 明らかな成就の授記による利益

現在明らかに成就することによる利益は、例えば「勸持品<sup>(24)</sup>」に、龍王の子がこの妙法を聞くことにより無上の結果を得ることを八衆のすべてが明らかに見るので無量の歓喜と感激を得る如くで<sup>(25)</sup>、この經典を解説する時に天と人と非天などにより色と無量の三昧を得て<sup>(26)</sup>、眼は清浄で普賢菩薩の行に入ることなどの多くの利益は、今生における利益である<sup>(27)</sup>。

### [1.4.2] 他時

他世における利益は、この經典の解説を聞く福德の多くの善根を広げる時に、他世において広げるので、この經典を随喜する福德は、三千の大千の世間界の衆生すべてに七宝の布施を与え、一切衆生の阿羅漢の結果を述べることでこの福德が大いに説かれ、さらにまたこの妙法を求める比丘に奉仕をただけでも、決して驕や唾に生まれず、誰かが書き、読み、根を浄化する無数の福德を得ることは、他世における利益である<sup>(28)</sup>。

## [1.5] 時と根により説いたもの

### [1.5.1] 時

時と根を説いたものは、時にも二種あり、仏世尊の説法も頓に示す時と、漸に示す時とである<sup>(29)</sup>。

#### [1.5.1.1] 頓時に説いたもの

頓に示すとは、鋭根のために説いており、衆生が下品の地から無上の結果を得ることを求めるからである<sup>(30)</sup>。

#### [1.5.1.2] 漸時に説いたもの

仏世尊の説法の時も五種あり、最初に等証覚を得てから500人の商人に対する三帰依と十善などは世間の諦なので根本が説かれている<sup>(31)</sup>。その次に涅槃してから12年の間に有をとまなう教えの小乗の經典である阿含などが説かれる<sup>(32)</sup>。その次に明らかに悟ってから30年の間に有と無の主張から始めて、法が説かれる<sup>(33)</sup>。その次に明らかに悟ってから40年の間に一乗より始めて、如来の自性が常住であることを示す典籍である『妙法蓮華經』自身の典籍が説かれる<sup>(34)</sup>。その次に「サーラ樹下ですべての衆生に如来の自性は存在すると説かれている」とも述べられており、如来の説法は、教説の言葉がそれぞれの根に熟することである<sup>(35)</sup>。例えば一味に降る雨がさまざまな樹脂にそれぞれ熟する如くなので「このように説かれた」と確定するだけではない<sup>(36)</sup>。例えば『解深密經』に、勝義の眞実の聖なる菩薩による質問からも、世尊が明らかに悟ってから最初に鹿野苑の仙人が降りる場所で聖なる声聞たちに四諦より始めて法輪を廻すことも「希有なるものが一切世間に明らかに生じる法輪を廻す」と発せられても、それも有上で、機会をともない、論難の邪魔があるものとの一つに確定していない。その次に諸菩薩に大乘より始めて、一切法は不生・不起で、本来寂靜で、自性による涅槃が明らかでない在り方で述べて、法輪を廻しても、とても珍しく希有なもので、以前に生じたものであるけれども、それも有上で、機会をとまなうことが一つに確定せず、論難をとまなうものである。その次に世尊は一切乗より始めて、一切法は自性により不生で、涅槃で、明らかなものを述べて、説法は、「無上で、機会がなく、論難の邪魔がない」と説かれている。最初に、声聞に阿含の典籍を解説して、有を明らかなものと説かなくても、有そのものは自性を成立させず、般若波羅蜜の内空性と説かれても、空の自性が成立することはないことが、『華嚴經』などに有たるものとして明らかに述べられたものに対しても、依他起と円成実性は有に依っており、説かれた譬喩として『大涅槃經<sup>(37)</sup>』にも、例えば、ある薬に精通した者が地方で乳を身体に取ることを述べたことで、すべての人が乳だけを飲むことで病気になる、死者もたくさんになった。その治療として乳を断じるために、「乳は毒であり、誰も乳を飲むな」と命ずることで、

地方で病気は少なくなった。その次にその国の王に薬を捨てさせるために、薬が乳と合わせられ、医者王が叱責し「以前に『乳は毒である』」と言い、今度は食べる薬が乳と合わせられるのか」と言うことに対して、乳だけを飲む場合に、そのように述べたことも真実であるならば、今度は薬と合わせられ、病気に有益な時に捨てられないものでもなく、如来の説いたものも、そのように見られる<sup>(38)</sup>。

### [1.5.2] 根

根は、例えば『大槃涅槃經』に、「一切衆生の根は一つで、すべて如来の自性をもつので、およそ心により捉えたものはすべて無上等証覚を明らかに悟る」と説かれている。また、經にも「十方の如来の一切の国土は一乗で、二や三として存在しないので、善巧方便により楽しむものは除く」と出ているから。この經典の中からも一乗が説かれているので、自性も一乗であるならば、また自性に二種あり、成就した自性と成就させる自性とである。成就した自性は、經典に「一切衆生に如来の自性は存在する」と説かれている。成就させる自性が成就させられるならば、成就する自性をもっている。また、衆生に自性と無自性の二つあり<sup>(39)</sup>、無始より六処において高低に転じ、住するのは成就に依る衆生で、自性をもつものである。無自性は、例えば発心して精進をなしていても、天と人の善が成熟しているだけで、無上菩提を得ることはできない<sup>(40)</sup>。『聖楞伽經』に、種姓は五種で、声聞種姓と独覚種姓と如来の種姓と不定種姓と無種姓とである。無種姓も二種で、一切の善根が焼かれた衆生と、菩薩が大悲により衆生の辺と結合して涅槃しないことの二つである<sup>(41)</sup>。それ故にこの經典の解説の意図でもある一乗を説いたものが菩薩の種姓をもつ者に依ってから雨の一味により草木が三種にそれぞれ熟することが声聞のために説かれている<sup>(42)</sup>。

## [2] 經典の意味を説いたもの

### [2.1] 一般的意味

これ以後は数えられた第二の見出しで、この經典自身の典籍が説かれている。またすべての經典について一般的に四種の在り方で説かれており、自性が存在する典籍で五蘊の自性が事物として存在するものと、自性を排除する典籍で一切法は事物をもつものではないが相のみとして存在すると説くものと、相が減する典籍で智慧の波羅蜜のような法の相も排除してから空性を説いた典籍と、真実であるものを説いた典籍で『華嚴經』のように真実たるものが明らかに説かれており中観の在り方を解説したものとの四つより、この經典は第四の典籍に見られる<sup>(43)</sup>。また、声聞はそれぞれの典籍が異なり、大衆部などの典籍が異なり、27見が異なることで、それぞれに言うことも多いけれども、略して三つである。有部である小乗の典籍である『阿含經』などに説かれていても、結局は空性の特徴と異ならない般若波羅蜜多の典籍のよう

な空性を説いていても有とは矛盾していない。『華嚴經』と『解深密經』などに有無の二つの辺を排除して説かれていても、有為と無為の相は有と説かれ、我と我所への執着が排除されただけのものを超えていない<sup>(44)</sup>。『華嚴經』に、如来による一語が説かれているので、衆生はそれぞれの根のように理解するようになり、さらにまた諸經典より、如来が明らかに悟ってから40年の間に常に一切法は生起せず、生じず、行くことがなく、来ることがなく、得がなく、損害がなく、特徴がなく、一つの特徴だけを示すことによっても、衆生らの理解が異なるようになることも、それぞれの根から成立したものであって、例えば天の如意の太鼓の音から法を聞くことは異なるように、大小の乗に漸と頓に入ることもそのように見られる<sup>(45)</sup>。

## [2.2] この經典の特徴

第二のこの經典の特徴を解説したものについて、この經典は「妙法蓮華」と言われる經典で<sup>(46)</sup>、この經典の解説を意図する奇瑞が、眉間の白毫から白光が顕れ、白牛の車に乗ってから蓮華を見ることで、法を説くことも、白は一切の色の根本である。一乗も一切の乗の根本であると説くために蓮華による譬喩が説かれている。この經典の中から、原因と結果と論理と知恵が最高と示すそのことを「妙法蓮華」と言い、如来の知恵の顕現を開く無上の身を得るからである。論理自体が知恵に依るので、如来の行境に入ることは、原因も一乗にあり、無上の場所に至ることが、一乗の結果であると見られる<sup>(47)</sup>。また、この法を「蓮華」と名付けたものも、意味は二種で、水から生じることと花が開くことである。二乗の泥水をもつものより特に勝れているからであり、「正しい教説に依ってから真実の意味の門を開く」と言われる<sup>(48)</sup>。また、如来の不可思議な意図は論理で、精通し難いそのことを「妙法」と言う<sup>(49)</sup>。さらにまた、考察が甚深で、教義が甚深なので、聖教と教義と成就と結果のすべても一乗たるものであるので、「妙法蓮華」と言われるのもそれである<sup>(50)</sup>。そのうち聖教は正しい教義を発する行為をなし、教義は引き出されるものを自ら引き出す力があり、成就は結果を成熟する力が存在し、結果は原因が成立させる目的が存在するようにすることである<sup>(51)</sup>。

## [3] 經典の章の順番により説いたもの

### [3.1] 章の数

この經典の中から、章の数と名称を説いたものは27章のものがあるうち、最初の「序品」と「方便品」と「譬喩品」と「信解品」と「藥草喩品」と「授記品」と「化城喩品」と「五百弟子受記品」と「授学無学人記品」と「法師品」と「見宝塔品」と「勸持品」と「安樂行品」と、「從地涌出品」と「如来寿量品」と「分別功德品」と「隨喜功德品」と、「法師功德品」と「常不輕菩薩品」と「如来神力品」と「陀羅尼品」と「藥王菩薩本事品」と「妙音菩薩品」と「觀世音菩薩品」と「妙莊嚴王本事品」と「普賢菩薩勸発品」と「囑累品」である<sup>(52)</sup>。それらの

章も、法の意味から名付けられたものが四つと<sup>(53)</sup>、譬喩から名付けられたものが三つと<sup>(54)</sup>、何れかの菩薩による請願から名付けられたものが四つと<sup>(55)</sup>、意味から名付けられたものが四つと<sup>(56)</sup>、意味と菩薩の両者から名付けられたものが九つと<sup>(57)</sup>、不定の二つで、「安樂行」と「見宝塔」の二つは原因と結果の両者を結びつけるために不定で<sup>(58)</sup>、まとめて27である<sup>(59)</sup>。

### [3.2] 章の順序

27章の順序の解説は、如来による法の解説を意図して、多くの有情を見られてから表彰し、昏沈が取り除かれ、根を浄化してからそれぞれの根に相応する法が説かれるので、最初に「序品」が説かれている<sup>(60)</sup>。「序品」が説かれてから真実の教義そのものを説いていると認められ、一乗の教義を示すことも導き、了義の鋭根と鈍根をそれぞれに益するために、その次に「方便品」が説かれている<sup>(61)</sup>。鋭根と鈍根に法を次第に区別して説いたことでも甚深なものを理解できないので比喩により理解させるために、その次に「譬喩品」が説かれる<sup>(62)</sup>。譬喩により甚深なる意味を見て、信を起こすために、その次に「信解品」が説かれる<sup>(63)</sup>。信が生じて、さらに確定してはいないので、それを堅固にするためにまた「藥草喩品」が説かれる<sup>(64)</sup>。四大声聞は甚深な意味を見るのでその結果を説くために、その次に「授記品」が説かれる<sup>(65)</sup>。鋭根と中根の二つの者が知を起こしていても、鈍根の者たちが何度も繰り返し、理解させるために「化城喩品」が説かれている<sup>(66)</sup>。鋭根の者たちが意味を議論するだけで理解し、信が生じて、授記のとおり鈍根の者たちも二度三度と繰り返すことで理解が生じ、その授記を意図するために、その次に「五百弟子受記品」が説かれる<sup>(67)</sup>。根の種のとおりその他の比丘たちも理解が生じるので、その次に「授学無学人記品」が述べられる<sup>(68)</sup>。鋭根と劣根の三次第の者にそれぞれに授記して、長時の未来の時における善法の譬喩の考えを設定するために、その次に「法師品」が設定される<sup>(69)</sup>。聖教のとおり成就して、真実そのものを理解する他の特相である信を起こすために過去の諸聖者が生じる「見宝塔品」が説かれる<sup>(70)</sup>。その意味自体により理解しておらず、他の意味もなすことを意図することで王の身体に変化して法を説くために、その次に「化城喩品<sup>(71)</sup>」が説かれる<sup>(72)</sup>。この經典のように自と他の価値と尊敬をなすために菩薩らが保持を請願するので、その次に「勸持品」が説かれている<sup>(73)</sup>。未来時に法を成就する行道が異なっているものたちの身体に煩惱を生じさせることに対して行道の在り方を説くことで行道を学ぶために、その次に「安樂行品」が説かれる<sup>(74)</sup>。ガンガーの川の砂の量の菩薩らがこの正法を聞いてから保持し、学ぶことを喜び、誓願から仏世尊の過去も菩薩で過失の垢を離れた者たちが起きてからこれを保持することを誓願することを説くために菩薩らが地面からたくさん涌き出ること、その次に「従地涌出品」が置かれる<sup>(75)</sup>。多くの衆会の菩薩が地面から涌き出のを見てから、「これは如来であるシャーキャムニが以前に成就しただけで、これはシャーキャムニによる変化ではない」という疑いを取り除くために如来は寿命

が無限であり、その次に「如来寿量品」が置かれる<sup>(76)</sup>。その如来の寿量がその如くならば、法身と報身の功德と寿命も無量であることを方便により説くことでそれらの衆生に信解を起こすために、その次に「分別功德品」が説かれている<sup>(77)</sup>。そのように福德の異門がないことを説くことで衆生らに信を起こすために、その次に「随喜功德品」が置かれる<sup>(78)</sup>。他者の行為を随喜するだけでも無量の福德を得るのならば、実際に解説し、唱える者は言うまでもないことを説くために、その次に「法師功德品」が置かれる<sup>(79)</sup>。その法師が無上菩提になることで法師に対する誹謗は大きな罪であることを説くために、その次に「常不輕菩薩品」が置かれる<sup>(80)</sup>。如来が大きな福德の次第を説いても、信解が小さい衆生には必要が生じることもあり、それを欺かない理由で「如来神力品」が置かれる<sup>(81)</sup>。薬王が以前にこの妙法を求めて身体と生命に執着しないことで精進を求める以前の在り方を説くために、その次に「薬王菩薩品」がおかれる<sup>(82)</sup>。真実の法行がこの世間と他の界に広く発せられるために妙音菩薩が発したのものに入るために、その次に「妙音菩薩品」が置かれる<sup>(83)</sup>。衆生らがこの経を保持することに対する障碍と中断が大きいので大悲をもつ聖観自在菩薩に依る「観世音菩薩品」が置かれている<sup>(84)</sup>。障碍と中断を寂滅させるために「陀羅尼品」が置かれる<sup>(85)</sup>。以前の理由と序に依るので、その次に「妙莊嚴王本事品」が置かれる<sup>(86)</sup>。すべての国土において詳しく説くために、その次に「普賢菩薩勸発品」が置かれる<sup>(87)</sup>。この經典を解説する本文が完成し、到彼岸によりその次に教えて付与するに値するので、その次に「囑累品」が置かれる<sup>(88)</sup>。

#### 4. 漢文テキストとチベット語訳テキストの対応関係

漢文テキストの科文 (T. No. 1723)			チベット語訳テキスト
0	初釈経文略以六門料簡	651b1	漢文は注釈に先立ち、著述意図 (651a6-17) と「序品」の意味 (651a18-29) を述べた後に、「經 如是我聞 贊曰」で解説が始まる。また、序文部分の構成は、漢文が「六門」であるのに対し、チベット語訳は「四義」となる
1	叙経起之意	651b4	チベット語訳の [2] のタイトルに混乱がある
1-1	酬因請	651b6	チベット語訳はこの項目に混乱がある
1-1-1	酬因	651b7	チベット語訳はこの項目を欠く
1-1-1-1	酬行因	651b15	一致
1-1-1-2	酬願因	651b26	ほぼ一致
1-1-1-3	酬求因	651c4	一致するが、「天授品」のタイトルが異なる
1-1-1-4	酬持因	651c14	ほぼ一致

1-1-1-5	酬相因	651c28	ほぼ一致
1-1-1-6	酬説因	652a11	ほぼ一致
1-1-2	酬請	652a17	ほぼ一致するが、後半の引用を欠く
1-2	破疑執	652b19	チベット語訳は「執」の項目を欠く
1-2-1	破疑	652b19	一致するが、後半の經典の引用を欠く
1-2-2	破執	652c6	チベット語訳はこの項目を欠く
1-2-2-1	声聞有二	652c6	
1-2-2-1-1	決定種姓	652c6	
1-2-2-1-2	退已還發大菩提心	652c9	
1-2-2-2	菩薩亦二	652c18	
1-2-2-2-1	頓悟	652c18	
1-2-2-2-2	漸悟	652c18	
1-2-2-2-2-1	若從得二乗果發心向大	652c19	
1-2-2-2-2-2	但從曾發二心曾修二行 來歸者	652c23	
1-3	彰記行	653b28	
1-3-1	彰記	653b28	經典の引用を欠く
1-3-2	彰行	653c12	一致するが、後半の經典の引用を欠く
1-4	利今後	653c26	
1-4-1	利今	653c26	一致
1-4-1-1	果記利	653c28	前半部分の解説を欠く
1-4-1-1-1	六処示現授記	654a20	
1-4-1-1-1-1	別記	654a21	
1-4-1-1-1-2	同記	654a22	
1-4-1-1-1-3	後記	654a23	
1-4-1-1-1-4	無怨記	654a25	
1-4-1-1-1-5	通行記	654a26	
1-4-1-1-1-6	具因記	654a29	後半部分の解説を欠く
1-4-1-2	現証利	654b6	
1-4-2	利後	654c10	後半部分の解説を欠く
1-5	顯時機	655a2	一致

1-5-1	顕時	655a2	一致
1-5-1-1	頓	655a3	チベット語訳は『勝鬘經』以下の文を欠く
1-5-1-2	漸	655a5	ほぼ一致するが、部分的欠落がある
1-5-2	顕機	656a17	『楞伽經』の引用部分までは一致、經論の引用などの欠落を挟み、末尾の草木の譬えの言及は一致
2	明經之宗旨	657a8	ほぼ一致するが、部派名などの細かな名称の列挙を欠く
3	解經品得名	657c3	經名の解説部分は抄訳、章の数は27とする
4	顯經品廢立	659a17	チベット語訳はすべて欠く
5	彰品之次第	660b4	一致するが、末尾の「囑累品」後置の理由を欠く
6	釈經之本文	661a28	「序品」以下の本文の解説

## 注

- (1) 拙稿「チベット語訳『妙法蓮華註』「授學無學人記品」和訳」（松村壽徹先生古稀記念論文集刊行会編『日蓮教學教団史の諸問題』山喜房佛書林, 2014）があり、参考文献などについては同稿による。
- (2) 漢文：①叙經起之意、②明經之宗旨、③解經品得名、④顯經品廢立、⑤彰品之次第、⑥釈經之本文  
藏文：①經典の解説の序論、②この經典の章の意味を説いたもの、③章の順番により説いたもの、④本文を解説するもの
- (3) 漢文：①為酬因請、②為破疑執、③為彰記行、④為利今後、⑤為顯時機  
藏文：①序、②議論と疑惑への執着の除去、③授記の行により説いたもの、④今時と他時における利益をおく意味を説いたもの、⑤時と根により説いたもの
- (4) 漢文：①酬行因、②酬願因、③酬求因、④酬持因、⑤酬相因、⑥酬說因  
藏文：①行、②願、③求めること、④保持すること、⑤奇瑞、⑥解説する原因（見出しは欠落）
- (5) T. No. 1723, 651b1-4: 初釋經文略以六門料簡一叙經起之意二明經之宗旨三解經品得名四顯經品廢立五彰品之次第六釋經之本文
- (6) T. No. 1723, 651b4-6: 第一叙經起意者略由五義一為酬因請二為破疑執三為彰記行四為利今後五為顯時機
- (7) 漢文は、「T. No. 1723, 651b6-7: 酬因請中有二一酬因二酬請」とし、序を二つに分けて解説する。
- (8) T. No. 1723, 651b7-9: 初酬因有六一酬行因二酬願因三酬求因四酬持因五酬相因六酬說因。ただしチベット語訳は、漢文と同様に第6項目目の「解説する原因」が本文に見られる。
- (9) T. No. 1723, 651b9-15: 佛果不可虛成必由業行方得行不孤起必願資生行願雖復自興無緣不能獨會雖逢

緣以求重非率爾而果成要由持學始能得果得果既圓將陳應物表經宗之深妙先現大相之因大相既彰理須敷唱  
故標佛本出世爲一大事故也由此酬因具斯六義

- (10) Tib: pa su ban dhus. 漢文には、「准論」とあるのみで、彼の名称はない。チベット語訳者は、この「論」を『法華論』と理解していたことになり、同論の内容がチベットに伝わっていた可能性を示す。
- (11) T. No. 1723, 651b15-26: 酬行因者方便品中准論釋經八甚深云佛會親近百千萬億無數諸佛盡行諸佛無量道法勇猛精進名稱普聞成就甚深未曾有法難解法者如來能知隨宜所說意趣難解一切聲聞辟支佛所不能知八甚深者一受持讀誦甚深二修行三果行四增長功德心五快妙事心六無上七入八不共聲聞辟支佛所作住持甚深經唯有六無第六第八至下當知諸佛道法既盡行之具行一乘種智之因方得佛果故今酬因說斯妙法勸脩因行
- (12) T. No. 1723, 651b26-29: 酬願因者方便品云舍利弗善聽我本立誓願欲令一切衆如我等無異如我昔所願今者已滿足化一切衆生令入於佛道。ただし、チベット語訳は、以下の「寿量品」の引用 (T. No. 1723, 651b29-c4) を欠く。
- (13) 漢文は「天授品」として「提婆品」を引用するが、チベット語訳は「勸持品」とする。
- (14) T. No. 1723, 651c5-14: 酬求因者天授品云吾於過去求法華經無有懈倦於多劫中常作國王求大菩提曾不退轉擊鼓宣令四方時有仙人來白王言我有大乘名妙法蓮華經若不違我當爲宣說王聞仙人言歡喜踊躍即隨仙人供給所須乃至以身而爲床座身心無倦奉事仙人經於千歲爲求法故令無所乏爾時王者今我身是時仙人者今提婆達多是以佛過去願行雖成必由緣會恒重此經於善友所專事求之故今宣說令生求重
- (15) T. No. 1723, 651c14-28: 酬持因者前八甚深中第一佛會親近百千萬億無數諸佛名受持讀誦甚深初依菩薩供五恒佛第二依菩薩供六恒佛第三依菩薩供七恒佛第四依菩薩供八恒佛值多善友長時受持又釋迦如來過去自爲常不輕菩薩於威音王佛滅後行不輕行臨終之時聞虛空中說法華經二十千萬億億悉能受持即得如上六根清淨更增壽命二百萬億那由他歲廣說此經命終之後得值二千億佛皆號日月燈明常持此經以是因緣又值二千億佛同號雲自在燈王亦於此諸佛法中受持此經常獲如上六根清淨其常不輕即我身是故爲往時常持此經今者說之勸常受持
- (16) T. No. 1723, 651c28-652a11: 酬相因者既成佛已將說此經先爲菩薩說無量義經次入無量義處三昧天雨四華地振六種四衆瞻仰八部歡喜放豪光以遠矚衆見此已疑生彌勒發問文殊告言如我惟付今佛世尊欲說大法雨大法雨吹大法螺擊大法鼓演大法義我於過去曾見此瑞放斯光已即說大法乃至廣說今日如來當說大乘經名妙法蓮華三世諸佛將說此經必先有此種種大相不同餘經餘經無此初大相故相既非常故須說此即將說此經先現大相先現大相者爲說此經故也
- (17) チベット語訳は、これに対応する漢文の「酬說因」の解説「T. No. 1723, 652a11-17: 酬說因者下云諸佛如來唯以一大事因緣故出現於世乃至廣說無聲聞弟子但教化菩薩。究竟令得一切種智故三世諸佛成道究竟必說一乘皆是因中方便趣求修學雖滿未曾演說今時機會不可虛然故趣宿因說斯妙法上來義類經文甚多恐厭繁廣故略指述」を欠いている。
- (18) チベット語訳は、ここに漢文の「後酬請」の解説「T. No. 1723, 652a17-b7: 後酬請者如經中說菩薩初生即行七步放大光明遍照十方四顧觀視作師子吼而說偈言我生胎分盡是最最後身我已得解脫當復度衆生

作是誓已身漸長大遊出四門見老病死及沙門相既問識已欲捨親屬求無上果中夜觀察見諸伎人后妃嫔女狀如臭屍深可厭患即命車匿令被毘低諸天捧足夜半出城行十四由旬到跋伽婆仙人所住林中以刀剃髮持妙寶服寶鹿皮衣造車匿歸報父王已於熙連河側六師外道所爲降伏彼六年苦行勤苦過彼日食麻麥厭其非道遂食乳糜受吉祥草詣菩提樹坐金剛座以智慧力降伏魔軍證大菩提永出三界是時三千大千世界主及餘天等來詣佛所請轉法輪化佛讚揚勸且權說時機未熟且說方便未說實法今既合宜憐子等請說乘權實之境文殊等請說乘安樂之行彌勒等請說身真應之果」が挿入される。また、チベット語訳は、漢文の以下の解説（T. No. 1723, 652b7-18）を欠いている。

(19) T. No. 1723, 652b19-28: 破疑執中有二一破疑二破執破疑者佛自成道唯記菩薩當得菩提不說聲聞有得佛果聲聞等疑永不作佛故舍利弗深自感傷失於如來無量知見乃至廣說而今從佛聞所未聞未曾有法斷諸疑悔諸小菩薩昔聞大乘亦疑菩薩獨得菩提聲聞無分或不定性諸小菩薩疑佛菩提已亦無分由是三乘俱有疑網由此經云聲聞若菩薩聞我所說法乃至於一偈皆成佛無疑。ただし、チベット語訳は、これに続く漢文の解説（T. No. 1723, 652b28-653b27）を欠いている。

(20) T. No. 1723, 653b28-cl: 彰記行中有二一彰記二彰行初彰記者佛自成道未爲聲聞授菩提記今爲授記故說是經。ただし、チベット語訳は、これに続く漢文の解説（T. No. 1723, 653c1-12）を欠いている。

(21) T. No. 1723, 653c12-15: 後彰行者今說菩薩一乘之行一乘正是菩薩行放下經云有佛子心淨柔軟亦利根無量諸佛所而行深妙道爲此諸佛子說是大乘經。ただし、チベット語訳は、これに続く漢文の解説（T. No. 1723, 653c15-25）を欠いている。Cf. 中村1972, pp. 699-700.

(22) T. No. 1723, 653c26-28: 利今後中有二一利今二利後初利今者法華一會所有凡聖宜聞法華而得益故此有二類一果記利二現證利

(23) T. No. 1723, 654a18-b5: 於五百弟子授記品中深生領解佛述成已便爲五百弟子及學無學人授記即是利今聲聞衆也經出六處示現授記一者別記舍利弗及四大聲聞衆所知識名號不同故與別記二者同記富樓那等五百人千二百人同一名故俱時與記三者後記學無學等非衆所知識共同一號就下根中後時與記四無怨記示現如來無怨惡故與提婆達多記五通行記顯示女人在家出家修菩薩行皆證佛果故與比丘尼及天女記此上五記說今時益皆如來記六具因記常不輕菩薩禮拜讚歎言我不輕汝汝等皆當作佛示現衆生皆有佛性故此之一種菩薩與記說往時益初三及第五利聞法華記餘之二種非由聞此記然前五記並名利今即果記利也然諸聲聞授記以後受變易生相狀體義至後當知。ただし、チベット語訳は、これに先立つ漢文の「方便品」から「化城喻品」までの解説部分（T. No. 1723, 653c28- 654a18）を欠いている。

(24) 漢文は「提婆達多品」とする。

(25) T. No. 1723, 654b6-11: 現證利者復有多種如提婆達多品雖龍宮涌出龍女道成皆由法華非靈山會益略而不說唯有龍女成道演說法時娑婆世界菩薩聲聞八龍天部人與非人皆遙見彼龍女成佛普爲時會人天說法心大歡喜悉遙敬禮。ただし、チベット語訳は、続く漢文の解説（T. No. 1723, 654b11-29）を欠いている。

(26) 対応箇所の確認はできないが、三昧の語が見られるのは次の句「T. No. 1723, 654b29-c2: 說妙音品八萬四千人得現一切色身三昧四萬二千天子得無生法忍華德菩薩得法華三昧」である。また、チベット語

訳は、これに続く漢文の解説（T. No. 1723, 654c2-4）を欠いている。

- (27) T. No. 1723, 654c4-9: 說妙莊嚴王本事品八萬四千人遠塵離垢得法眼淨說普賢勸發品恒河沙等無量無邊菩薩得百萬旋陀羅尼三千大千世界微塵等菩薩行普賢道前五記記當得佛此二十五類現證因位並是利今故說法華
- (28) T. No. 1723, 654c9: 後利後者散席以後因法華經所獲功德皆是利後隨喜功德品說第五十人一間法華經能隨喜者功德過於布施四百萬億那由他三千大千世界衆生金銀七寶又勝令得阿羅漢果若往僧房須臾聽法華經者生生常乘象馬車乘七寶輦與及乘天宮若復分坐令他聽者生生常得帝釋坐處梵王坐處若復勸人往聽法華生生常與陀羅尼菩薩共生一處終不瘡癰乃至當來見佛聞法信受教誨法師功德品說若善男子善女人受持是法華經若讀若誦若解說若書寫是人當得八百眼功德千二百耳功德八百鼻功德千二百舌功德八百身功德千二百意功德以是功德莊嚴六根皆令清淨乃至普賢品云若有後世受持讀誦是經典者是人不復貪著衣服臥具飲食資生之物所願不虛亦於現世得其福報。ただし、チベット語訳はこれに続く漢文の解説（T. No. 1723, 654c27-655a1）を欠いている。
- (29) T. No. 1723, 655a2-3: 顯時機中有二一顯時二顯機初顯時者諸佛設教略有二種一頓二漸
- (30) T. No. 1723, 655a3-5: 頓即被彼大機頓從凡夫以求佛果如勝鬘經所說一乘一乘是權四乘實故。ただし、チベット語訳は後半の【勝鬘經】の引用を欠く。
- (31) T. No. 1723, 655a5-11: 漸即被彼從小至大機如此經中所說一乘一乘是實二乘權故此經多被從彼二乘以求佛果多是漸教大乘所攝古有釋言教有五時第一時者佛初成道爲提謂等五百賢人但說三歸五戒十善世間因果教即提謂等五戒本行經是未有出世善根器故。ただし、チベット語訳は前半の導入部分を欠いている。
- (32) T. No. 1723, 655a11-13: 第二時者佛成道竟三七日外十二年中唯說三乘有行之教未爲說空即阿含等小乘經是
- (33) T. No. 1723, 655a13-15: 第三時者佛成道竟三十年中說彼三乘同行空教即維摩思益小品等是
- (34) T. No. 1723, 655a15-19: 第四時者佛成道竟四十年中說有一乘猶未分明演說佛性常住實相尙說無常佛果以爲眞實即無量義法華等是以前未明一乘義故此中猶未分明演說常住佛性故
- (35) T. No. 1723, 655a19-20: 第五時者謂雙林中說諸衆生悉有佛性常住佛教。ただし、チベット語訳は続く漢文の經典の引用（T. No. 1723, 655a20-b18）を欠いている。
- (36) T. No. 1723, 655b18-19: 是知一雨普潤稟解不同不可說佛教必有先後。ただし、チベット語訳は続く漢文の古義の解説（T. No. 1723, 655b19-23）を欠いている。
- (37) T. No. 374, 378a-b.
- (38) T. No. 1723, 655b23-c29: 解深密經中佛爲勝義生菩薩依於三性說三無性皆是遍計所執性已勝義生菩薩深生領解廣說世間毘濕縛藥雜糅書地熱蘇虛空諸譬喻已世尊讚歎善解所說勝義生白言佛初於一時在波羅痾斯仙人墮處施鹿林中唯爲發趣聲聞乘者以四諦相轉正法輪雖是甚奇甚爲希有一切世間無能轉者而於彼時所轉法輪有上有容是未了義是諸淨論安足處所世尊在昔第二時中唯爲發趣修大乘者依一切法皆無自性無生無滅本來寂靜自性涅槃以隱密相轉正法輪雖更甚奇甚爲希有而於彼時所轉法輪亦是有所容受猶未了義亦諸淨

論安足處所世尊于今第三時中普爲發起一切乘者依一切法皆無自性無生無滅本來寂靜自性涅槃無自性性以顯了相轉正法輪第一甚奇最爲希有于今世尊所轉法輪無上無所容受是眞了義非諸諍論安足處所依此經文阿含經等爲第一時總密說有不明有者有其何性大般若等爲第二時總密說空不明空者亦空何性華嚴經等爲第三時顯了說有有依他圓成亦顯了說空空所執性故善戒經等云有爲無爲名爲有我及我所名爲空金光明經亦說三法輪謂轉照轉轉四諦法以空照有非有非空可任持故涅槃亦言初有醫師教人服乳由純服乳國人多死後有醫師說乳爲毒教並令斷國人並差後王有疾問藥所宜醫更藥方以乳和藥王顧問彼汝先所說乳爲毒藥何故今者令和藥服醫答王言前爲純服國人多死常純服之故說爲毒恐不能斷總令斷之案實理者有病宜服有病不宜王今此病宜和藥服正所應可佛言我法亦復如是。ただし、チベット語訳は続く漢文の經典の引用（T. No. 1723, 655c29-656a17）を欠いている。

(39) 山口1970, p. 689.

(40) T. No. 1723, 656a17-b4: 後顯機者依涅槃經唯有一機故彼經云師子吼者是決定說一切衆生悉有佛性又云衆生亦爾悉皆有心凡有心者悉皆當得阿耨多羅三藐三菩提此經亦云十方佛土中唯有一乘法無二亦無三除佛方便說但教化菩薩無聲聞弟子乃至廣說若聲聞若菩薩聞我說法皆成於佛依此唯有一大乘性此經既說一乘被彼大乘根性然性有二一理性勝鬘所說如來藏是二行性楞伽所說如來藏是前皆有之後性或無談有藏無說皆作佛依善戒經地持論中唯說有二一有種姓二無種姓彼經論云性種姓者無始法爾六處殊勝展轉相續此依行性有種姓也。無種姓人無種性故雖復發心勤行精進終不能得無上菩提但以人天善根而成就之。ただし、チベット語訳はこれに続く漢文の『攝大乘論』の引用など（T. No. 1723, 656b4-c14）を欠いている。Cf. 中村1972, p. 706.

(41) T. No. 1723, 656c14-18: 楞伽經云佛告大慧有五種種姓證法一聲聞乘姓二辟支佛乘姓三如來乘姓四不定乘姓五者無姓謂一闍提此有二種一者焚燒一切善根即謗菩薩藏二者憐愍一切衆生。ただし、チベット語訳はこれに続く漢文の『楞伽經』の引用（T. No. 1723, 656c18-657a1）を欠いている。

(42) T. No. 1723, 657a1-4: 此經被彼與莊嚴同若以一乘爲宗唯被有菩薩姓不被唯聲聞姓一雨所潤三草各別可被聲聞。ただし、チベット語訳はこれに続く漢文の『瑜伽論』などの引用（T. No. 1723, 657a4-7）を欠いている。

(43) T. No. 1723, 657a8-13: 第二明經宗旨此方先德總判經論有其四宗一立性宗雜心等是立五聚法有體性故二破性宗成實論是破法有體唯有相故三破相宗般若等是破法相狀亦成空故四顯實宗涅槃華嚴法華等是顯於眞實中道義故此經即是第四宗也

(44) T. No. 1723, 657a13-29: 且古經論宗致極多舊四阿含及僧祇律大衆部義三彌帝論上座部義舍利弗阿毘曇梵網六十二見經正量部義四分律是法藏部義此等經論復是何宗然文殊問經及支輪論說小乘有二十部謂大衆部一說部說出世部雞胤部多聞部說假部制多山部西山住部北山住部說一切有部雪轉部犢子部法上部賢胄部正量部密林山部化地部法藏部飲光部經量部并大乘二合二十二宗今依文判教教但有若以類准宗宗乃有八教但三者一多說有宗諸阿含等小乘義是雖多說有亦不違空二多說空宗中百十二門般若等是雖多說空亦不違有三非空有宗華嚴深密・法華等是說有爲・無爲名之爲有我及我所名爲空故此等三教如前引文。ただし、

チベット語訳はこれに続く漢文の八宗の解説（T. No. 1723, 657a29-b8）を欠いている。

- (45) T. No. 1723, 657b8-17: 然華嚴云如來以一語言中演說無邊契經海無垢稱經言佛以一音演說法衆生隨類各得解。無量義經言我成道來四十餘年常說諸法不生不滅不去不來無此無彼無得無失一切無相但由衆生悟解不同得諸果異法華亦言一雨普潤三草二木生長不同優婆塞戒經言三獸渡河得淺深別攝論亦言如末尼天鼓無思成自事故知諸教本無差別由機不同遂分大小頓漸之教。ただし、チベット語訳はこれに続く漢文の解説部分（T. No. 1723, 657b17-c2）を欠いている。
- (46) T. No. 1723, 657c3-4: 第三解經品得名者且經題目妙法蓮華經名者。ただし、チベット語訳はこれに続く漢文のサンスクリット語のタイトルの解説（T. No. 1723, 657c4-10）を欠いている。
- (47) T. No. 1723, 657c10-20: 經義應云妙法白蓮華經所以下云放白豪光駕以白牛白是衆色所依根本一乘乃是諸乘本故梵本無別白字故總云蓮華然此經中鷲子三請惡人退席已後方說一乘深旨多依因果理智以名法華開佛知見雙歎顯理智法報二身二種無上令生欣趣示佛知見是法身理示同令證悟佛知見是報身智勸其脩悟此上三種歎顯佛果法報二身涅槃菩提理智二訖入佛知見是此二因行一乘因趣極果故。ただし、チベット語訳はこれに続く漢文の解説（T. No. 1723, 657c20-29）を欠いている。
- (48) T. No. 1723, 657c29-658a3: 蓮華有二義一出水義所詮之理出離二乘泥濁水故二開敷義以勝教言開眞理故。前爲理妙後爲教妙
- (49) 以下の「方便品」の句「T. No. 1723, 658a3-12: 又彼諸名第十四名亦名一乘故知法華亦通教理欲令菩薩觀機授道故說教・理正名無量義傍亦名爲法華方便品云諸佛智慧甚深無量其智慧門難解難入論自釋言有二甚深一證甚深謂佛智慧所證智也二阿含甚深謂智慧門即詮彼教欲拂二乘令生驚心故從無量義處定起」をまとめたものか。
- (50) T. No. 1723, 658a9-12: 初以教理名爲法華總攬諸文據實而說教理行果俱是一乘皆名妙法蓮華。ただし、チベット語訳はこれに続く漢文の解説（T. No. 1723, 658a12-b2）を欠いている。
- (51) T. No. 1723, 658b2-4: 教有能敷妙理之功理有所敷出水之力行有因敷趣果之因果有結實爲因之能故也。ただし、チベット語訳はこれに続く漢文の解説（T. No. 1723, 658b4-c14）を欠いている。以上は、教と理と行と果による解説をまとめたものか。
- (52) T. No. 1723, 658c15-23: 其品得名者經有二十八品謂序品方便品譬喻品信解品藥草喻品授記品化城喻品五百弟子授記品授學無學人記品法師品見寶塔品提婆達多品勸持品安樂行品從地涌出品如來壽量品分別功德品隨喜功德品法師功德品常不輕菩薩品如來神力品囑累品藥王菩薩本事品妙音菩薩品觀世音菩薩普門品陀羅尼品妙莊嚴王本事品普賢菩薩勸發品。なお、チベット語訳は、「提婆品」を欠いている。
- (53) T. No. 1723, 658c23-27: 於此諸品總爲四例一義爲名有十五二義爲名有十三義爲名有一不定爲名有二一義爲名有十五中復爲四例從法爲名有四方便品信解品持品陀羅尼品
- (54) T. No. 1723, 658c27-28: 從喻爲名有三譬喻品藥草喻品化城喻品
- (55) T. No. 1723, 658c28-659a1: 從人爲名有四法師品提婆達多品常不輕菩薩品妙音菩薩品。漢文は、この後に「法師品」を分けて説明「T. No. 1723, 659a1-2: 其法師品有法之師從人名中法即是師以法爲師從法

名中隨應可悉」するが、チベット語訳には欠けている。また、チベット語訳は、「提婆品」を数に入れているが、そのタイトルは述べられない。

- (56) T. No. 1723, 659a2-4: 従事爲名有四序品授記品從地涌出品囑累品
- (57) T. No. 1723, 659a4-9: 二義爲名有十中復有三例從人法爲名有八授學無學人記品如來壽量品法師功德品如來神力品藥王菩薩本事品觀世音菩薩普門品妙莊嚴王本事品普賢菩薩勸發品能所爲名有一分別功德品因果爲名有一隨喜功德品。ただし、漢文は二義によるものを10とし、人法によるものを8、能所によるものを1、因果によるものを1とする。
- (58) T. No. 1723, 659a11-23: 不定爲名有二一安樂行品二見寶塔品安樂之義通因果故其見之義通見現故安樂在因見者現也即一義名中若安樂在果見者見也即二義名中思准可悉且依總類以辨得名得名所從至品當釋
- (59) チベット語訳に列挙された数を計算すると26であるが、これは三義によるもの「T. No. 1723, 659a9-11: 三義爲名有一五百弟子授記品五百者數弟子者人授記者事故成三義」を欠いているためである。Cf. 遠藤1984, pp. 18-19. なお、この後の漢文に見られる「T. No. 1723, 659a17-660b3: 第四顯經品發立者…」については、中国における注釈者の解釈を論じているために、チベット語に翻訳されない。
- (60) T. No. 1723, 660b4-6: 第五彰品次第者凡欲說法必先警覺群情機集緣和乃可應物宣暢陳說之漸初名序品
- (61) T. No. 1723, 660b6-10: 序品既說次辨正宗衆既集而未闕須陳宗以訓誘法說一乘爲實略開二運爲權言一實而導彼歸途顯二權而令斯返跡。智揚善巧妙應上根語演神功津理故次有方便品
- (62) T. No. 1723, 660b10-15: 上根領悟佛重述成方有授記應有領述及授記品良以鴛子獨穎不可孤明領述授記文小略故譬喻品初寄其領述及爲授記中根之類雖聞法說猶未能解不因曉喻無以解生故有譬喻品
- (63) T. No. 1723, 660b15-16: 智者因喻領慧隨生故有信解品
- (64) T. No. 1723, 660b16-17: 雖少信解尙未深知爲破疑情重成其意故有藥草喻品
- (65) T. No. 1723, 660b17-18: 四大聲聞既深領解記其當果故次有授記品
- (66) T. No. 1723, 660b18-22: 上中二性雖復解生下根之徒猶無悟相必假丁寧之說欣資鄭重之訓說過去結緣之始覺照其心述彼所得涅槃本非真滅令歸寶所趣大涅槃故次有化城喻品
- (67) T. No. 1723, 660b22-25: 高名之輩因說即解應有信解復重淨心良由三遍慇懃領解文略印亦不廣不別生品先陳高名當果之相故有五百弟子授記品
- (68) T. No. 1723, 660b25-27: 下位之儔時漸亦達爲之授記故有授學無學人記品
- (69) T. No. 1723, 660b27-28: 三根並悟說利已周將使遠代同規歎人美法令弘大義故有法師品
- (70) T. No. 1723, 660b28-c3: 依法修學若法若人可師範故破小執而成大道會權旨以入眞宗信學既希歸崇亦夥多寶現塔分身佛集勸長時明信證說不虛故有見寶塔品
- (71) 遠藤1984, p. 22は、「提婆品と思われる」とするが、原題は「以前に生じたもの」で、「化城喻品」の原題と同じである。これは、チベット語訳者が「提婆品」の存在を理解できずに、他の章のタイトルを繰り返しただけのことである。

- (72) T. No. 1723, 660c3-7: 雖他佛說證信此經未顯自尊勸人歸仰故顯身作國王爲重此經於彼怨家爲床求法亦顯經威廣大度龍宮衆極多法力速成化龍女以成道故有提婆達多品
- (73) T. No. 1723, 660c7-9: 既現自他俱爲寶重威弘用速慰勸勉聞經菩薩皆受教而願持故有持品若依論本言勸持品
- (74) T. No. 1723, 660c9-13: 此經無勸因前勸而今持故名勸持理亦無爽其有末代行法多越軌摸今示儀方令易宣暢法既易行自離傷毀故有安樂行品
- (75) T. No. 1723, 660c13-16: 八恒菩薩開妙道以願持佛時不許明已有持弘者遂有六萬恒沙菩薩久離毀傷先願弘宣勸發時會故有從地涌出品
- (76) T. No. 1723, 660c16-18: 衆見涌出謂此化而非眞父子老疑非釋迦所化今明我道久成所化故宜非小爲釋此疑難故有如來壽量品
- (77) T. No. 1723, 660c18-22: 報佛之身現壽量而長遠法身之體亦方便以宣揚故知釋迦由來化質佛德深妙聞信者多利益既弘功德無量今明時衆差別獲益故有分別功德品
- (78) T. No. 1723, 660c22-23: 時宜所益雖已具陳有能隨喜福亦不小故有隨喜功德品
- (79) T. No. 1723, 660c23-25: 傍人隨喜尙獲福多正能宣闡功德彌衆故有法師功德品
- (80) T. No. 1723, 660c25-26: 法師持經必當作佛毀法師者獲罪無量引己爲證故有常不輕品
- (81) T. No. 1723, 660c26-29: 如來勸說福事俱多恐衆生疑謂佛虛唱欲顯已言不謬何得誑汝衆生縱神力以示之故有如來神力品
- (82) T. No. 1723, 660c29-661a2: 藥王昔者殉命持經說彼本緣勸勉時會故有藥王菩薩本事品
- (83) T. No. 1723, 661a2-4: 流行正法此彼之士皆通藥王已此土加揚故召妙音令他方傳授故有妙音菩薩品
- (84) T. No. 1723, 661a4-5: 衆生持經多諸障難必假普示諸法門大悲救護故有觀世音菩薩普門品
- (85) T. No. 1723, 661a6-8: 雖念觀音憑人救難未持神呪仰法威加欲令廣有威靈持經易所成濟故有陀羅尼品
- (86) T. No. 1723, 661a8-10: 持經之力不簡怨親經福所資常生勝所欲明古今相即以勸弘於妙旨故有妙莊嚴王本事品
- (87) T. No. 1723, 661a10-12: 雖此土他土皆有弘經未有此方他方俱爲勸勵故有普賢菩薩勸發品
- (88) T. No. 1723, 661a12-13: 讚勸既周化緣已畢慇懃付授遠使流通故有囑累品。なお、漢文はこの後に、「囑累品」が後置された理由を説明「T. No. 1723, 661a13-15: 此依正法華及論囑累品居後釋其次第若神力品後即說囑累人情曲解未契通途也」するが、チベット語訳は省略する。

## 【キーワード】

『妙法蓮華經玄贊』、『法華經』、『序品』、基、慈恩大師